

日台交流を通して考える防災と教育実践への応用

— JENESYS2025 台湾派遣研修成果報告 —

氏名：西川幸二

所属：明星大学通信教育課程
教育学部教育学科 4年

はじめに

2026年3月18日から24日まで実施された「対日理解促進交流プログラム JENESYS2025 2024 Phase II」台湾派遣に参加し、防災をテーマとした日台学生交流および現地視察を通して、多くの知見と教育的示唆を得ることができた。本研修では、日台の学生が防災について議論を行い、交流活動や文化体験を通して相互理解を深めた。私は現在、都立高校において外国とつながる生徒への日本語指導を担当しており、今後は中国語教育にも携わる予定である。本稿では、今回の台湾研修で得た学びを、自身の日本語・中国語教育の実践にどのように活かしていくかという観点から報告する。

① 国を越えて防災について考える意義

今回の研修では、「防災」をテーマとして台湾の学生と議論を重ねた。議論を通して強く感じたのは、国を越えて防災について考えることの意義である。日本と台湾は地理的に近く、気候や自然環境にも共通点が多く、台風や地震など類似した自然災害に直面している。しかし、台湾の学生との討論を通して、両国の防災意識や制度には違いがあり、それぞれに特徴があることに気づかされた。

例えば、防災バッグについて話題にした際、日本の学生の多くが日頃から準備していることを知った台湾の学生は驚きを示していた。日本では学校教育や社会全体を通して防災意識が日常的に共有されていることが改めて認識された。一方で、災害時のボランティア活動について台湾の学生から話を聞いた際には、災害発生後すぐにインターネット上で救援物資やボランティアを募集する仕組みが機能し、多くの市民が迅速に支援活動へ参加するという点に強い印象を受けた。そこには、日本にはないスピード感と主体的な参加意識が見られた。

このように、防災という共通のテーマであっても国によって考え方や行動様式が異なることを知ることで、自国の防災体制を客観的に見直す契機となると同時に、他国から学びを得る重要性を実感した。

現在、都立高校で多くの外国にルーツを持つ生徒と接する中で、日本で育った生徒と来日間もない生徒との間には、防災に対する理解や意識に差があることを感じている。学校では定期的に避難訓練が行われているが、防災意識が十分でない生徒にとっては受動的な行事として終わってしまう場合もある。その結果、実際の災害時に適切な行動を取ることが難し

くなる可能性がある。

今回の研修で得た経験を活かし、異なる国にルーツを持つ生徒同士が防災について意見交換を行う機会を教育現場に取り入れることで、主体的に防災を考える学びを促したいと考える。対話を通して多様な視点に触れることが、防災理解の深化につながると確信している。



② 身体活動を通じたコミュニケーションの深化

日台学生合宿では、「山訓アスレチック」を体験する機会があった。自然豊かな復興青年活動センターにおいて、ヘルメットとロープを装着し、綱渡りや木登り、丸太上での協力ゲームなどの活動を行った。異国の地でこのような活動に取り組むことは非常に新鮮な経験であったが、台湾の学生から、台湾では小学校から高校まで毎年このような野外活動が行われていると聞き、教育を学ぶ立場として台湾の学校教育の一端を体験できたことは大きな学びとなった。

活動中は、挑戦する仲間を互いに励まし合い、協力しながら課題に取り組む場面が多く見られた。言語による説明が十分でなくても、身振りや表情、行動を通して自然に意思疎通が生まれ、台湾の学生との心理的距離が急速に縮まることを実感した。この経験から、身体活動が言語の壁を越えたコミュニケーションを促進する有効な手段であることを学んだ。

学校教育においては、学年が上がるにつれて受験や進路指導が重視され、屋外活動や身体を使った協働的な学習の機会は減少する傾向にある。しかし、自然環境の中で五感を使いながら行う活動には、教室内では得難い学びが存在すると感じた。こうした経験は、異文化間の交流をより円滑にし、相互理解を深める重要な要素となる。

今後の教育活動においては、言語学習だけに限定せず、身体活動や協働体験を取り入れた学習機会を積極的に設計し、多様な背景を持つ学習者同士が自然に関わり合える環境づくりを目指したい。



③ 研修を通して得た学びと今後への展望

本研修を通して、異なる文化や社会背景を持つ学生と直接対話し、協働的な活動を行うことの意義を強く実感した。防災という共通課題について国を越えて議論する経験は、自国の価値観を相対化し、新たな視点を獲得する貴重な機会となった。また、身体活動を通じた交流では、言語だけに依存しないコミュニケーションの重要性を学び、相互理解が深まる過程を体験的に理解することができた。

今後は、本研修で得た学びを日本語教育および中国語教育の実践へ還元し、多様な背景を持つ学習者が対話と協働を通して学び合える教育環境の構築に努めたい。今回の経験を一過性のものとせず、教育現場に継続的に活かしていくことこそが、本研修の成果を社会へ広げることにつながると考える。

(2109 字)